

6.

奇才フンデルトバッサの集合住宅

田中 辰明 お茶の水女子大学 教授

1. フンデルトバッサと建築

「うそー、まじ？」今の若い人ならフンデルトバッサの建築を見るとき、そう叫んでしまうであろう。赤や黄色、緑、そして青が多用され、どこまでも続く曲線、渦巻きが多用され屋根や窓から樹木が覗いている建築、それがウィーン出身の建築家フンデルトバッサの作品である。フンデルトバッサは1928年にウィーンで生まれ、本名をフリードリッヒ・シュトバッサ (Friedrich Stowasser) といった。生誕直後の1929年に技術職の役人であった父親を失っている。少年時代から色彩と造形に特異の才能を示し、教師を驚かせたが、母方がユダヤ系の家族であった為、1938年には強制疎開を行い祖母と叔母の元に行っている。そして1943年には母方の親族69名が強制連行され殺害されている。その中には祖母、叔母も含まれていた。このような生い立ちが氏の作品に多大な影響を与えたとする解説書もある¹⁾。1948年に大学入学資格を得、ウィーン美術工芸アカデミー (Akademie der Bildenden Künste in Wien) に入学、ロビン・クリスチャン・アンダーセン (Prof. Robin Christian Andersen) 教授に師事している²⁾。このアカデミーは画家を目指して受験したヒットラーが入学に失敗をした事でも有名な学校である。しかしアカデミーでは長続きせず1949年に北イタリア、トスカーナ、ローマ、ナポリ、シシリア島を絵を描きながら旅行する。そこで後に氏の建築に現れる赤や黄色、緑、そして青が多用され、どこまでも続く曲線、渦巻きが絵画に現れてくる。この年が氏の様式が確立されたときでもあった。そしてこの年にフンデルトバッサ (Friedensreich

Hundertwasser) と名乗るようになる。Hundertはドイツ語で「百」をWasserは「水」を意味し、「百水」ということになる。ちなみにFriedensreichは「平和な帝国」を意味する。幼少の頃ユダヤ系の血をひく市民として迫害を受けたことは生涯決して忘却できるものではなかった。氏の作品はこの名前から水と親しむ建築が多い。水が流れ、緑が茂り、人と自然が共存する建築である。事実氏の作品には噴水や池があるものが多い。その後も外国旅行を繰り返し、特にパリでの生活が長く、絵を描いては展覧会を開き、賞を得るという生活を繰り返している。1961年には訪日を果たし、毎日新聞社から賞を得ている。1962年には日本女性と結婚をするが1966年に離婚している。1977年に当時のウィーン市長レオポルド・グラッツ (Leopold Gratz) に受け入れられ、氏の思い通りの市営住宅を建設することを勧められる。しかし建築は四角いものとする当時の常識派の反対運動もあり、相当の苦勞の結果、市営住宅を完成、現在で言う環境共生住宅のはしり、パイオニアとなる。地域暖房プラントなども従来は無味乾燥の建築の典型的なものであったが、氏が手がけたウィーンのSpittelauer Landeにあるプラントの煙突には金色の大きな球が付けられ、建物にも緑が植えられ、赤、白、緑、黄色と彩色され、まさにおとぎの国の建物である。1999年に71歳で亡くなるまで、集合住宅、スパ、ごみ焼却場、ホテル、地域暖房プラント、教会、学校など20あまりの建築物をオーストリア、南ドイツを中心に、そして日本では大阪にも残している。多くの常識派の反対運動にも屈せず氏の主張を貫き通し楽しい環境共生住宅を残せたのは幼年時代に母方がユダヤ系であったために受けた迫害を

耐え抜いた事により培われた精神力であった。氏の作品はオーストリア、南ドイツに多いが、実は大阪市の此花区にも氏の作品によるゴミ焼却場がある。尤も、過激政治風刺ライブ「他言無用」を全国で展開する戯作家松崎菊也氏は「2度と来なくなる全天候型のテーマパークか、景観もへったくれも無い、地元出身の成金が建てたラブホテルか。それがまさかのことにゴミ焼却場であったとは。」²⁾とこき下ろしている。

2. フンデルトバッサーの作品

以下筆者が調査を行った氏の作品について解説を行う。写真は全て筆者撮影によるものである。

2.1 ドイツプロヒンゲン (Plochingen) の集合住宅

プロヒンゲンはシュットガルトの郊外にあり、シュットガルト中央駅から郊外電車で40分程度で行くことができる。ウルム (Ulm) やミュンヘン (München) 方向に向かう列車も鈍行であればプロヒンゲンに停車する。駅前すでに「Hundertwasserhaus フンデルトバッサーの住宅」と立て看板があり、徒歩5分程度で到着する至近距離にある。列車の車窓からもこの目立つ住宅は目に入る。当初建築家シュプリングマン氏 (Heinz. M. Springmann) が手がけていたが、ベック (Beck) 市長の要請によりフンデルトバッサーが参加した。一部工業用地を含む、高速道路と鉄道の交差する土地に立っている。市長は「プロヒンゲンのシンボルになる住宅を！」と要請し、フンデルトバッサーはこれに応え、高い派手な水道塔を設け、これが住宅のそしてプロヒンゲンのシンボルとなり、高速道路を走る車や列車の車窓から見えるようにしてある。住宅は中庭を設け、中庭に面するファッサードに曲線を多く取り入れた窓、多彩な着色、そして窓辺の植栽と訪問者の目を楽しませてくれる。ウイーン郊外で生まれたフンデルトバッサーは「ウイーンのような大都会に自然は無く、そこに多くの人が生活をしている。ではその生活の舞台である住宅に自然を取り入れればよいではないか、そして自分が幼少時代をすごした

オーストリアの森、郊外に直線は無、全て曲線から構成されていた」と主張し、ここプロヒンゲンの集合住宅だけでなく全て氏の作品は曲線が取り入れられている。但し、ここの住人も本来中庭で日光浴をしたり、コーヒーやビールを飲んだりすることを希望するであ

写真1 プロヒンゲンの集合住宅中庭



写真2 プロヒンゲンの集合住宅にあるフンデルトバッサーのモザイク像



写真4 プロヒンゲンにある集合住宅の給水塔、これが遠くからも見えることからプロヒンゲンのシンボルともなっている。

写真3 プロヒンゲンの集合住宅中庭、屋上に植栽

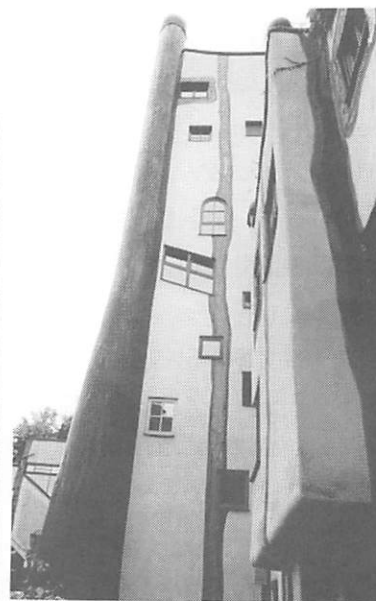


写真5 プロヒンゲンの集合住宅の入り口、本人が鍵を持っているか、ここから居住者にインターホンで知らせ、室内から扉の鍵の解錠をしてもらわないと中には入れない。



ろうが、こうも多くの見物客が訪問するとなると住人のプライバシーなど損なわれてしまうであろう。有名建築家の作品の住人にはプライバシー保護の権利はある程度損なわれても仕方が無いのかもしれない。という筆者も実に出張のある度、この住宅を訪問し、その数4回になる。決して特定の住宅を覗きに行ったわけではない事をお断りしておく。この住宅の着工は1990年11月、引渡しは1994年2月である。写1～5にプロヒンゲンの集合住宅を示す。

2.2 ドイツダルムシュタット (Darmstadt) にある集合住宅

ダルムシュタットはフランクフルトの南、凡そ40kmのところにある工業都市である。人口14万人の市である。ここの大化学工業会社に敷地を隣接してフンデルトバッサーの住宅が建っている。この住宅は一時化学工場の拡張に伴い取り壊しの危機にたたされたことがあった。しかし一般市民の反対運動によりその難は免れて現在も存在している。そのような災難があったせいか、他のフンデルトバッサー住宅に比べ、建物が若

写真6 ダルムシュタットの集合住宅、曲線が続くファッサード



写真7 ダルムシュタットの集合住宅、様々な形をした窓が面白い。



写真8 ダルムシュタットの集合住宅入り口、大きな葱坊主が楽しい。



写真9 ダルムシュタットの集合住宅、平面はU字型であるが陸に浮かぶ彩色豊かな艦船のようにも見える。



干疲れたように見える。これは住宅の着色が少し褪せてしまったせいかもしれない。この住宅はダウムシュタットの森の螺旋 “Waldspirale von Darmstadt” と呼ばれている。所在地はBad Neuheimer Strasse 6, D-64289 Darmstadtである。建物の平面はU字形になっており、中庭が存在する。写6～9にこの住宅の写真を示す。

2.3 ウィーンの市営集合住宅

(Hundertwasserhaus Wien)

この住宅はフンデルトバッサを建築家として有名にさせた作品で「集合住宅は直線からなる、特に公共建築においては」というウィーン市の建築担当者の概念を打ち破ったものである。1977年に設計に入り、1983年8月着工、1986年2月に竣工している。ここでフンデルトバッサは建築家ペリカン (Peter Pelikan) の協力を得ている。設計着手から着工まで相当の歳月を要しているがウィーンの集合住宅、公共建築の概念を打ち破ることに対する抵抗が大きかったことを想像させる。しかし「フンデルトバッサの思うようにやりなさい」という当時のウィーン市長グラッツ (Leopold Gratz) の強力な後ろ盾を得てこれを完成させている。1977年12月16日にウィーンの市庁舎を訪問し、フォヒ助役 (Pfoch) と面会し、ウィーン市役所の建築技師クラビナ (Josef Krawina) の協力を得ることになった。屋上には葱坊主がのり、様々な樹木が植栽され、窓からも木が生え茂っている、ファサードはカラフルな色彩と曲線。フンデルトバッサを世界的に有名にした代表作である。住宅はウィーンのKegelgasseと Löwengasseに面して建てられている。フンデルトバッサはここでも建築職人と一緒に仕事をし、コンクリート練り、タイル貼りまで手を出し、直接指導を行った。屋上の植栽も職人が適当に植えたのではないかと想像されるが、実はそうではなく、フンデルトバッサが屋上の植栽図面を描き、しらかば、クルミ、桜、菩提樹、などを植える場所を丁寧に示している。正真正銘の設計施工である。

フンデルトバッサはこの住宅に寄せて「この家は人間の鏡の映像である “Das Haus ist das Spiegelbild des Menschen” 」という言葉を残している。

写真10にウィーン市営集合住宅の写真を示す。

写真10 ウィーン市営集合住宅、この作品でフンデルトバッサは世界に知られるようになった。



2.4 ウィーン芸術の家 (Kunsthau Wien)

家具会社トーネット兄弟社 (Gebrüder Thonet) の跡地にあり銀行家フロツテル (Walter Flottle) の出資によるもので、公的資金は入っていない。ウィーン市営住宅の比較的近く、Unteren Weisgerberstrasseに建っている。フロツテルはウィーンを欧州の地理的な中心と考え、ここでの国際芸術展示を希望した。着工が1989年で、1991年4月に竣工している。展示場面積は4000㎡あり、1階は入場券売り場、コーヒーショップ、売店、クロークなどがあり、2階がフンデルトバッサの作品展示場となっている。氏の描いた数々の絵画、つづれ織りの掛けもの、建築模型などが展示されている。そして3、4階は展示物が置き換わる国際展示場となっている。フンデルトバッサはこの建物に対し、「芸術は色彩を認知しなければならない」「芸術は人間に向けられたものでなければならない」「芸術は創造の為のものか？それとも創造に相反するものか」「芸術は人間の為のものか？それとも人間に相反するものか」という言葉を残している。この芸術の家もウィーンの街中にありながら多くの緑を取り込み、特に中庭の緑は素晴らしい。ここではコーヒーやケーキを飲み食べることが出来る。しばし旅行の疲れを癒すのに最適な場所である。日本の夏にこのような場所でボートしていればたちまちやぶ蚊の餌食に

写真11 ウィーンの「芸術の家」外観、
植栽が豊富である。



写真12 ウィーンの「芸術の家」の中庭ではコーヒ
ーが飲め、ウィーンのケーキも食べられる。



なったり、樹木から下がってくる毛虫がコーヒーに入
ってしまったりと、とんでもないことになるのであるが、
緯度の高い所に所在するウィーンではそういうことは
無い。写11にウィーン芸術の家の外観を示す。写12に
芸術の家の中庭を示す。

2.5 ウィーンシュピッテラウ (Spittelau) の地域 暖房プラント

住宅に熱を供給するプラントであり、以前は無味乾
燥な建物であった。ウィーン市の郊外にあり、市の中
央からは地下鉄で行くことができる。建築家ペリカン
(Peter Pelikan) の協力を得ている。また地域暖房
公社の技師クライナー (Jurgen Kleiner) が設備設

写真13 ウィーンの地域暖房プラント事務所建物



写真14 ウィーンの
地域暖房プラ
ントの煙突



写真15 ウィーンの地域暖房プラント、ゴミ焼却場



計を行っている。1988年に着工、1992年に竣工してい
る。とてもプラントと思えないカラフルな彩色、煙突
には葱坊主を用い、植栽を行っている。ゴミ焼却場の
廃熱を熱供給しようというもので、かつ煙突からの廃
ガスは極めて高度な浄化施設を採用している。フンデ

写真16 ウィーンの
地域暖房プラント
の壁面にも植栽が。



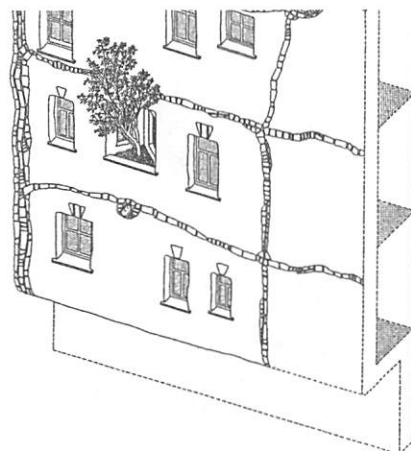
写真17 ウィーン地域暖房プラント、窓を模した
タイル貼りが楽しい。



ルトバツサーはこの建物に対し、「人間は自然から来た客人である。従ってゴミを出さないように努力すべきである」という言葉を残している。氏はゴミを出さないこととしてゴミ焼却の廃熱を利用し熱供給を行ったのである。写13～17に地域暖房プラントの外観を示す。写13のウィーン市地域暖房公社の巨大なマッチ箱のようにも見える事務所建築は、今まで紹介してきたフンデルトバツサーの建築とはやや異なる。これは事務所建築として建築家ノイマン氏によって設計されたものであった。どちらかというとな常識的な事務所建築で面白さは無い。経営者側はこれをファンタスティックなものにするように希望し、フンデルトバツサーがこれに応え、ほうろうを用いて赤い“燃え盛る炎”を建物に描いた。そして最上階の外壁にはFernwärme Wien（ウィーン地域暖房）とやはり赤い文字をこれも不規則に入れた。

フンデルトバツサーは建物の窓や屋上に植栽を行っ

図1
植栽の行われる
ファッサードの
図面¹⁾



た。これも適当に植木を配置したのではなく綿密に植栽をする場所、そこに植えるべき樹木を指定し、かつその図面を丁寧に描いている。その図面の例を図1に示す。

3. おわりに

フンデルトバツサーはここに紹介した以外の建築として教会、幼稚園、学校、サイロ、工場、温泉場など様々な楽しい作品を残している。また氏は本稿写2に見るように鳥打ち帽を愛用していた。建築現場でも鳥打ち帽を被り労働者と共に働いた。氏の作品の中に自らを取り入れてしまうことも行われ、例えば本稿写15の地域暖房プラントの屋上に丸いものが傾いておかれている。これは氏の鳥打ち帽、すなわちフンデルトバツサーを象徴している。文献-2として引用させて頂いた松崎菊也氏はフンデルトバツサーを「雲子がぎょうさん出そうな名前やないけ！」とまでこき下ろしているが大阪此花区のゴミ焼却場の前に立つ氏の写真はまさにフンデルトバツサーの愛用したのと同じ型の鳥打ち帽姿である。そのことは一切記述しておられないが、かなりフンデルトバツサーを研究された方であるのは間違いない。

〈参考文献〉

1. "Für ein natur-und menschengerechteres Bauen Hundertwasser Architektur" Benedikt Taschen Verlag GmbH
2. 松崎菊也「公共事業クイズ：あのUSJよりも目立ってしまう建物は何？」通販生活2005春号